

## アバウト感覚

先日ある地方都市へ出かけた。ところが、目指す駅前の有名ホテルが中々見つからない。最寄りの駅から「徒歩5分」とあるが、30分近く彷徨った挙句、地元の人に尋ねてようやく辿り着くことができた。土地勘の悪さは別にして、その原因は駅前の特徴のない景色、地図の表示と、ホテル看板の掲出の仕方にあるとみた。

いまやカーナビならいとも簡単に目的地を見つけ出すことができる。人間の土地勘は完全に機械に後れを取った。現実には自分の立ち位置から目的地の方向が分かりにくくなっているのだ。今日では、昔の観天望気のような永年の勘や知恵からものごとを推測する技術とか、全体を俯瞰する鳥瞰図の視点が欠けてしまっている。意外にも言葉や文字が分からない外国の都市では、あまりこんなことはない。東京の地下鉄よりニューヨークやパリの方がよほど分かりやすい。これは、ランドマーク的な景色や物体が容易に目に入ることと、地図にも遠方から凡その方角の見当がつくような工夫が凝らされているからである。その点では、現代より中世以前の都市計画や都市構造の方が幾倍か優れていたように思う。今日では、地域情報を必要とする地元のコミュニケーション力すら欠落している。

話題のIT技術も結構だが、現代人も昔ながらの知恵とか、生活慣習をもっと積極的に取り入れるようにした方が効果的である。

大陸的でやや大雑把ではあるが、ロシア人の規範の中にはいまもこの意識が強い。例えば、シベリア鉄道の線路傍には1kmごとにキロポストが建っている。そのキロポストの表示が、シベリア方向とモスクワ寄りでは1km異なる。小さい数字がモスクワ方面で、例えば吹雪で方向を見失ったとしても凡その方向が分かるような知恵と安全対策が施されている。

こうした素朴な知恵を、私たちももう少し見習った方が賢明だと思う。

(近藤)